

マタイの福音書 28 章 1～10 節までを今朝のテキストにしたいと思います。まず初めに通してお読みいたします。『さて、安息日が終わって(安息日というのは金曜日の日没から土曜日の日没までのことです。)、週の初めの日の明け方(これは日曜日のことです。)、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。(ほかのマリヤというのは 27 章 56 節にヤコブとヨセフの母マリヤとなっています。イエスの母もマリヤと言いますが、マグダラのマリヤもいれば、イエスの弟子のヤコブ。これは小ヤコブと呼ばれるヤコブです。もう 1 人弟子にはヤコブがいますから混同しないで下さい。ヤコブとヨハネの兄弟のお母さんは、ゼベダイの子とも呼ばれています。名はサロメと言います。いろいろと名前を出すと混乱してしまうかもしれないのでこのぐらいにしておきますけれども、何人かのマリヤがいて、そしてイエスが埋葬された墓に向かっているところでもあります。)<sup>2</sup>すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。<sup>3</sup>その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。<sup>4</sup>番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。(当時世界最強のローマ帝国の屈強な軍人たちも震え上がったわけです。ここで警護しているその場所から離れたならば、彼らの首は飛んでしまうわけです。命をかけて彼らは番をしているわけですが、あまりの恐怖に思わず逃げ出してしまったわけです。)<sup>5</sup>すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。(マグダラのマリヤとヤコブとヨセフの母マリヤ。彼女たちは心からイエスを愛していたことが分かります。十字架につけられたイエスを捜しているのを私は知っています、と御使いは言いました。)<sup>6</sup>ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらん下さい。<sup>7</sup>ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。』<sup>8</sup>そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。<sup>9</sup>すると、イエスが彼女たちに出会って、「おはよう。」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。(礼拝を捧げました。)<sup>10</sup>すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。』」ここは皆さんもよく知っているキリストの復活の様を記録した大切な箇所でもあります。イースターの朝の出来事です。今読んだテキストの中に、「恐れ」という言葉が何回か使われておりました。4 節、5 節、8 節、10 節に「恐れる」という言葉が繰り返し繰り返し使われていたことに皆さんはお気づきになったかと思います。復活の朝に恐れがあったわけです。そもそも私たちが今朝、この日曜日に礼拝に集まったのは、日曜日に復活された主を記念して、よみがえられた主をお祝いするために、主を拝むために、礼拝するために集まってきたわけです。でも、そこには恐れというものがありません。もしかしらこの中に、「礼拝には来たけれども私の心の中には常に恐れがあります。何か恐れています。」でも、そんなあなたに「恐れてはいけません。」と、若しくは「恐れることをやめなさい。」というのがここでの原意であります。5 節の『恐れてはいけません。』というところに＊印が付いていて、新改訳聖書ですと欄外には『恐れることをやめなさい。』とあります。『恐れることをやめなさい。』これは命令であります。今あなたは何かに恐れているでしょうか。「恐れを抱いているならば、恐れることを今やめなさい。もうあなたは恐れなくてもいいんだ。」と。なぜならばイエス・キリストがよみがえられたからです。恐れなくてもよくなったのは、イエス・キリストが復活されたからであります。そのことを今朝皆さんに覚えて頂きたいと思えます。

ここでへブル人への手紙 2:14～15 も参照して頂きたいと思えます。『<sup>14</sup>そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、<sup>15</sup> 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。』ここでは神の御子キリストが、私たちと同じく血と肉を持つ人間の姿になってこの世に来て下さったこと、すなわちクリスマス

のことが書いてありますが、それを神学用語では『**受肉**』とも言います。神が人となられた。それはクリスマスという出来事です。なぜイエスはこの世に来て下さったのでしょうか。なぜ神は私たちと同じ血肉の体をとってこの世に来て下さったのでしょうか。そのことが今読んだところに書いてあります。『これは、その死によって(十字架の死によって)、**悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、<sup>15</sup> 生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。**』とあります。クリスマスに神が人としてこの世に生まれて下さった。神が受肉されたその目的は、悪魔という死の力を持つ者を滅ぼして、生涯死の恐怖につながれて奴隷となっている私たちを解放して下さるためだ、と明言されております。私たちを死の恐怖から解放して下さるために、神は人となってこの世に来て下さいました。今へブル人への手紙をお開きであるならば、ついでに**9章27節**も見て頂きたいと思います。『そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。』聖書はこのようにハッキリ告げております。私たちは皆死ぬんだ。「そんなの当たり前じゃないですか。わざわざ聖書に書き込まなくて、記録としなくていいじゃないですか。当たり前ですよ、人間ならば死ぬんですから。」でも、その当たり前のことが私たちにとってはどうも受け入れ難いもの。人は必ず死にます。死ぬことは定められています。そして死んだら、誰もが神の前に立つこととなります。これは避けられない変わらない事実であります。信じたくなくても、受け入れたくなくても、死というものは現実であります。これは神の現実と同じだと考えてみて下さい。死が現実であるように、神もまた現実なるお方であります。人は避けようとし、神について認めたくない、考えたくないと思うわけです。死についても同様です。死は現実なんですけれども、死とは向き合いたくない。「死ぬのは嫌だ。死ぬのは怖い。死なんて考えたくない。」神の現実と死の現実は同じであります。

このことについてはローマ 1:20~25 にも書いてあります。参考までに私の方でお読みしますので聞いて頂きたいと思います。神の現実について書いてあります。『<sup>20</sup>神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。<sup>21</sup> それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。<sup>22</sup> 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、<sup>23</sup> 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち<sup>24</sup>に似た物と代えてしまいました。それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。<sup>25</sup> それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、どこしえにほめたたえられる方です。アーメン。』神の現実と死の現実とは、共に多くの人たちからは忌み嫌われるようなもの、避けたいもの、向き合いたくない、考えたくないといわれるものであります。

最近アップル社の創業者のスティーブ・ジョブズという人が亡くなって、彼の死は多くの人によって評価されております。皆さんの週報に『ジョブズ氏、信仰と人生の意味を模索』というそのヘッドラインの記事をもうご覧になった方もおられるかと思いますが、その中に、ジョブズが死を前にして考えたことがありました。これについては彼の自伝がもうベストセラーとなって出ておりますので読めば明らかにされておりますけれども、その中で、スティーブ・ジョブズという人は皆さんも知っての通り彼は永平寺において出家を考えたほど熱心な、ある意味敬虔な仏教徒でもあったと言われております。しかし、本当に死を目前とした時に、その仏教徒としての信仰も大分揺らいだようであり、変えられたようであります。そのことが彼の自伝に書いてあるそうです。ここではその一部を抜粋したものが記事となっておりますので、少し読み上げたいと思います。この自伝を書いたのはそこに記されているウォルター・アイザックソン、これはスティーブ・ジョブズの公認の自伝となっております。実際に晩年を共に過ごして、彼の心の動きをつぶさに細かくありのままを記録したわけですが、そのアイザックソンによりますと『ある日ジョブズ氏は裏庭に座り神について話し始められたことがあったのを覚えています。ジョブズ氏は「時々神を信じるんだ。しかし、信じない時もある。多分半分は信じて、半分は信じていないのだと思う。自分が癌になってからこのことについてもっと深く考えるようになってきたんだ。そしてもっと神を信じる時間が長くなっていることに気付いたんだ。多分その理由は、自分が死んだ後の世界があることを信じたいと思うからだと思う。つまり、もし死んだらその後すべてのこと、これまで自分が積

み重ねてきた知識の全てが、ただ無になるというわけではないと思うんだ。そのようなものはどうにかして死んだ後も残っているだろう。そうさ、生と死というのは、ONとOFFで切り替わるスイッチのようなものだと思うこともあるんだ。クリックすると死んでしまう。だからアップルの製品にはON/OFFで切り替わるスイッチをつけたいと思わないんだ。」と話されていました。』と。他のエピソードもそこには記録されております。死というものは現実であります。神というお方も現実なるお方でもあります。

イギリスの作家でかつてはイギリスの諜報員でもあったサマセット・モームという人が、常に皮肉めいたことばかり言っていた人だそうですが、死についてこういう名言を発しております。サマセット・モームの言葉です。『絶対に間違いのない統計、それは人間の死亡率が100%だということ。』当たり前のことですが、多くの人はこの当たり前の“死”という現実を受け入れたくない。人は向き合いたくもない、考えたくもない。自分だけは死なないんだと、どこかで自分に思い込ませようと。特に若い人たちは、自分が死ぬものだとあまり考えないかもしれません。どんな人間でも必ず死にます。遅かれ早かれです。死は誰にでも、どんな人にも平等に訪れます。良い人でも悪い人でも。沢山の功績を残した人でも何の功績も残さなかった人でも。皆誰もが、金持ちも貧乏人も皆平等に死にます。それなのに人間は、死について語ることを嫌います。当たり前の現実なのに、死については語りたがりません。「死について考えるなんて、死について語るなんて縁起が悪いじゃないですか。」とか、死をタブー視してあまり死について考えることをしない、避けようとしています。自分が死ぬべきものであるということを認めない、そんな姿勢が多くの人に見られます。死が怖いから、だから怖いことなんて考えたくない。そういう真理かもしれません。

これは聞いた話ですが、中国では政府の役人が退職する時に贈り物がなされるそうです。皆さんも退職祝いに何か会社から、若しくは家族からもらったことがあるかもしれません。ある人たちは安眠枕をもらったり、ある人たちはマッサージチェアをもらったり、ある人たちは旅行券などをもらったり、「ご苦労様、お疲れ様でした。」とねぎらいの言葉をかけられているいろいろな贈り物を贈られたかもしれませんが、でも中国では政府の役人には実はカスタムメイドの、オーダーメイドの棺がプレゼントされるそうです。お棺があげられるそうです。そんなことを聞くと皆さんぞっとするかもしれません。「退職したら、もう死になさい。」と言われているようで、でも、オーダーメイドなんです。その人の身長に合わせたピッタリサイズのジャストフィットのそのようなお棺が与えられるのは、勿論中国ではそれは非常に高価なものだということも1つ言えますけれども、死という現実を見つめながら私たちは死に向かってこれから生きようになるんだと。それは当たり前のことですが、避けて考えるべきことではないかと思えます。現実的に物事を考えながら、現実の人生を歩んでいく。なかなか洒落たプレゼントかもしれません。どんなに強がっても、粹がっても、内心はビクビクしているわけです。「死ぬのは怖い。死にたくない。死についてなんて考えたくない。」と、どんなに格好をつけても死を目前にしたら震えあがってしまいます。ワナワナしてしまいます。ガタガタしてしまいます。

聖書によれば私たちは一生涯死の恐怖に縛られているんだと、先ほどお読みしたヘブル 2:14~15 に書いてありました。今からいくつかのポイントを挙げて、私たちは死の恐怖に縛られているんだということを、現実的なことで皆さんもよく知っていることだと思うんですが改めてそれらを言葉にして指摘して皆さんに考えて頂きたいと思えます。まず第1番目に私たちは肉体的な死の恐怖に縛られているという点であります。異論はないと思えます。私たちは肉体的な死の恐怖に縛られております。いくら死にたくないと思っても、死が怖いと思って考えるのを避けようとしても、いくら死に対抗して抵抗してアンチエイジングだと言って一生懸命エステやフィットネスや健康食品で若作りを、涙ぐましい努力をしても死は現実であります。不老不死を願っても死はやって来ます。美容整形したって死はやって来ます。スティーブ・ジョブズという人も2004年に膵臓癌であることが分かって手術を医師から勧められましたが、彼はそれを拒みました。食事療法によって自分はこの癌を克服するんだと。マクロビオテックという特別な食事療法があります。それを彼は試みたんです。でも病状は悪化するばかり。9ヶ月後によく家族の説得に応じて、頑固だったジョブズ氏は折れて手術を受け入れました。自分の体を切り開いて欲しくなかったからだと、彼は後に言って、そのことを心から後悔しているとも認めております。死にたくない。死について考えたくない。怖いんです。

いろいろなものを試します。努力します。抵抗してみせます。対抗してみせますけれども、でも死は免れることはできません。誰でも誰の元にも死は訪れて来ます。今もここにいる皆さん全員は死につつあります。次の瞬間 1 秒後にはさらに死に近づいているわけです。明日になったらより一層死に近づいているわけですけれども、それは現実であります。クリスチャンであるならば肉体的な死の恐怖の問題からは解放されているかと思えます。ヨハネの福音書 11:25~26 でイエスがこのようにおっしゃっています。『**25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」**』「ハイ、信じます。」と言ったのはクリスチャンです。例えばある宗教の教祖が「私はこれから〇月〇日にこのように死にます。葬られます。でも、三日目によみがえります。」生前にそのように宣言していて果たしてそのようになったならば、皆さんはどうでしょうか。私はその教祖を信じます。死ぬ前に、〇月〇日に自分が死んで、どのような死に方をして、そしてしかも死から三日目によみがえったならば、その人の教え、その人の言葉に私は耳を傾けます。この人の言うことは間違いないと確信できるからです。イエス・キリストは、キリスト教の教祖ではありません。キリスト教の神です。そのイエスは生前「私は〇月〇日に×曜日に、また△時頃に十字架にかけられて殺されて葬られるけれども、三日目によみがえるんだ。」ということを経三再四生前において周囲の人たちに語っておりました。果たしてそれがその通りになったんです。私たちは信じます。これまで 2,000 年間このキリストの復活を否定できた者は、1 人もおりません。キリストの復活さえ否定できればキリスト教は崩壊いたします。このことは**第一コリント 15 章**にも書いてあります。「**キリストがよみがえられなかったならば、私たちの宣教は空しい、信仰は空しい。**」と書いてあります。でも、この復活は紛いもない事実です。これまでキリスト教を撲滅しようと願った多くの者たちが、キリストの復活の否定に研究を重ねて撲滅キャンペーンを展開したんですけれども、しかし誰一人として撲滅することはできませんでした。むしろ、キリストの復活について調べれば調べるほどそれが事実であることに衝突して、その人は信じるか信じないか、若しくは正確には信じたいか信じたくないのかと、この 2 つの二者択一に迫られて多くの者は「信じる他ない。これは否定できない事実だから。キリストはよみがえられた。これは事実である。史実である。リアリティーである。」ということに気付いて、信じたわけです。その中には C・S・ルイスという人もいますし、あの『ナルニア国物語』を書いた人です。また『ベンハー』を書いたルー・ウォレスという人もおります。彼らも皆キリストの復活を信じなかった、否定した無神論者、若しくは不可知論者であったんですけれども、知的巨人であったそんな彼らもキリストの復活の事実打ち負かされたんです。信じざるを得なくなったんです。

それはそうとしまして、私たちクリスチャンは彼らほどの頭脳はなくても、どういうわけか不思議と神の憐れみと恵みによって、イエスが私の罪のために十字架にかかって死んでくださり、三日目によみがえって下さったという、その事実を受け入れることができたわけです。ですから、もう私たちは死の恐怖に縛られていることはなくなったわけです。クリスチャンであるならば肉体的な死の恐怖からの縛りからは、もう解放されているわけです。イエスが自分の罪のために十字架にかかって三日目によみがえって下さったことを信じている者は、全員もれなく天国に行けるからです。だから肉体的に死のうともう怖くはないわけです。死んだら天国に行くからです。死ぬということはもっと良い所に引っ越しするということでもあります。クリスチャンにとってこの地上こそが最悪なんです。もっと素晴らしいベターな所があるわけです。クリスチャンでない者にとってはこの地上がベスト、最高なんです。空しいですね。

ローマ 4:25 にもこう書いてあります。『**主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。**』イエス・キリストが私たちの罪のために十字架にかかって死なれ、三日目によみがえって下さったことによって私たちは義と認められた、無罪宣告を受けたわけです。あなたの罪はすべて赦されました。もう罪悪感に、罪責感に悩むこともありません。それがクリスチャンという人たちであります。

しかし、あなたはこの肉体的な死の恐怖とは別の種類の恐怖に、もしかしたら縛られているかもしれません。**マタイ 28 章**の今朝のテキストの中にも、その肉体的な死以上の、また肉体的死以外の恐怖というものを描いていることにお気づきになったかと思えます。死の恐怖というものは何も肉体的なものばかりではないということです。それが次に第 2 番目として取り上げたいポイントです。第 1 番目は、私たちは肉体的な死の恐怖に縛られているというのが 1

つの現実であります。向き合わなければならぬ不可避な問題です。そして2番目として、あなたはたとえば肉体的な死以外の恐怖として、あなたは財政的な死の恐怖に縛られているのかもしれませんが。ファイナンスです。経済的な死の恐怖にあなたはもしかしたら縛られているのかもしれませんが。ローンの返済はどうなるだろうか。死ぬまでに返せるだろうかとか、退職するまでに。または退職後に、老後に十分な蓄えがあるだろうか。つい先日、日本の国の借金が1,000兆円を超えたというニュースがありましたけれども、この国が破綻することもあり得るんです。実際に破綻した国はあります。ですから、もしかしたら今までになかったような金融危機が訪れて、日本という国自体が破綻してしまうかもしれません。あてにしていた年金も、生命保険も、銀行の預金も、もしかしたら紙切れになってしまうかもしれません。もう株券が紙切れ同然になってしまった人もこの中にあるかもしれません。もしかしたら予期せぬ病に襲われて、例えばアルツハイマーになってしまうとか、認知症を患うとか、最近あった芸能人の女性のように、歌手のように、くも膜下になって急に倒れて、処置が遅れてしまえば植物状態になってしまう。そういうことも起こり得るわけです。寝たきりになってしまったら、大病を患ったら、難病を患ったら、その医療費は一体どうなるのだろうか。老人ホームで、特養でちゃんと見てもらえるだろうか。資金が不安です。財政的な経済的なそのファイナンスの死の恐怖に縛られている人もこの中にあるかもしれません。若い人ならば、子供の養育費、教育費。大学に行かせることができるだろうかとか。いろいろと死の恐怖があるわけです。

次に例えばですけれども、3番目として他の人たちは人間関係の死の恐怖に縛られているのかもしれませんが。人間関係の死の恐怖です。「あなたとはもうこれっきり。もう終わりだね。君が小さく見える。さよなら、さよなら、さよなら。」急に「他に好きな人ができたの。」とか、人間関係の死というものが突如訪れることがあるわけです。「もうあなたとはやっていけないわ。」女性の立場から言っていますけれども、男性の場合もあるわけです。「もうお前には飽きた。」とか言って、もっと若い子にとか。いろんなこともあるわけですけれども、人間関係の死というものも怖いですね。彼氏、彼女、恋人を失うかもしれない、大切な人を失うかもしれない、友だちを失うかもしれない、仲間を失うかもしれない、愛する者、家族を失うかもしれない。

またある人たちは4番目のポイントとして職業的な死の恐怖に縛られている人もいるかもしれません。職業的な死の恐怖。ある日突然クビになるかもしれません。「今日からもう来なくていいよ。」解雇宣告されることもあるかもしれません。リストラされる、レイオフされる、給与カットされる、降格される。怖いですが、仕事を失うこと。特に男性にとっては、仕事こそが自分のまるでアイデンティティーのように思っています。仕事のない自分は、自分を失ったかのような恐怖に駆られてしまいます。ですから退職してから多くの男性は何をしたらいいかわからないので、鬱になってしまったり、引きこもってしまう人もいます。仕事をしていない自分に価値を見出せないからです。仕事が自分のアイデンティティーだと思っているので、仕事を失ったその状態では自分が何者であるのか、何のために生きているのか、自分の存在意義すら見出せなくて路頭に迷ってしまう。そういう人もいます。それは彼らにとっては恐怖です。なによりもの恐怖となるわけです。ありとあらゆる死の恐怖というものが存在することを私たちは認めなくてはなりません。これ以外にもきつと色々な恐怖が皆さんのうちにあるかと思えます。認めたくないものもあると思います。

イエス・キリストは先ほども**ヘブル2章**で読んだように、私たちと同じ血肉の体をとってこの世に来て下さいました。神が人間となられたわけです。そして私たちの身代わりとなって十字架で死んで下さったわけです。それはすべての希望が尽きてしまったそのような時でありました。暗黒の時です。文字通り十字架の上でイエスが苦しんでいる時、真昼間だったのに太陽は光を失いました。真っ暗闇になりました。望み得ない時に、どうにもならない絶望的な状況のその時に、イエス・キリストはこの世に来て、そして死んで、よみがえって下さったわけです。何もかも全て失ってしまったようなそのような時に、イエス・キリストはあなたのもとに来て下さいます。墓からよみがえってくださるんです。そしてイエス・キリストは、究極の敵である最大の敵である『死』に打ち勝たれたわけです。死よりも強いものは他にはありません。それゆえイエスは無敵なわけです。イエスの前に何も、誰も立ちはだかることはできません。復活された方の前に立ちだかる敵はもはや無いということです。死という究極の最大の敵を、復活の主は打ち破ら

れたからです。肉体的な弱さ、病気も障害もイエスに打ち勝つことはできません。財政難も経済難もイエスに打ち勝つことはできません。人間関係のトラブルも、また仕事のトラブルもイエスに打ち勝つことはできません。イエスの前に立ち上がるものは何一つないわけです。イエスを打ち負かすものは何もありません。イエスはよみがえられて、今もここにいて生きておられる方です。“復活”という言葉ギリシャ語で「アナスタシス」と言います。これはマラナサ・グレイス・フェロシップの散骨苑・ガーデンの名前にもなっています。ガーデン・アナスタシス。「アナスタシス」というのは“復活”と訳されますが、原意は「立ち上がる」という意味です。イエスはあなたのために立ち上がってくださるお方です。「もう立てません。もう絶望です。」へなってしまう、へこんでしまって、「もう余力はありません。もう前には1歩も進めません。もう終わりです。もう死にます。もうダメです。」望み得ない時にイエスは立ち上がって下さいます。復活と言うのは、立ち上がるということです。もう一度やり直すことができるということです。再び立つ、再起ができるということです。セカンドチャンスがあなたに与えられるということです。そのよみがえられたイエス・キリストは、どこにいるのかといえば、信じる者の心のうちにおられます。イエスを信じる者の心のうちにイエス・キリストは住んでおられます。キリストが内住しているというわけです。ローマ 8:9~11 にこう書いてあります。『<sup>9</sup>けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中ではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。<sup>10</sup>もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。<sup>11</sup>もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かして下さるのです。』今イエス・キリストはキリストの御霊によって、聖霊によって信じる者の心のうちに住んでくださっております。このことはヨハネの福音書にも約束されますし、またコロサイ 1:27 にも『この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。』と。私たちの栄光の望み、栄光の希望は、私たちのうちに住んでおられるイエス・キリストであります。望み得ない時、希望が全く持てない時、あなたには栄光の希望があるということを忘れてはいけません。それはあなたのうちにおられるよみがえりの主イエス・キリストであります。すべてを失っても、キリストはあなたの心の中からは出て行きません。愛する者があなたを捨て去っても、仕事を失っても、何もかも失っても、すべてが津波でさらわれてしまったとしても、栄光の望みだけは潰え<sup>つ</sup>えませんが、流されません、消え去らないんです。あなたのうちにおられるキリストが、どんな時でも希望となります。復活の主があなたのうちに住んでおられるならば、ありとあらゆる死というものが、死の恐怖というものが取り去られて、あなたは復活します。ありとあらゆる種類の死の恐怖からあなたは解放されて、ありとあらゆる死において打ち勝って復活するんです。新しく生まれることができます。再び生まれることができます。新生するんです。再生するんです。リニューアルするんです。リフレッシュされるんです。敗者も復活します。再起できるんです。セカンドチャンスが与えられるんです。再び立ち上がることができるようにされるのです。あなたのうちにはよみがえりの主が、立ち上がってくださる主が生きておられるからです。住んでおられるからです。肉体的に病を患ったとしても、私のうちにあなたのうちに誰が住んでおられると思うでしょうか。よみがえりの主が、私のうちにあなたのうちに住んでおられるならば、主が病気のあなたを、障害を持ってしまったあなたの面倒を最後の最後まで見て下さいます。ある者は地上でその病を癒され、数年、数十年、余命が与えられて、所謂天寿を全うすることもあるかもしれません。でも、ある者はそのまま天国へ召されていく者もあろうかと思えます。でも、天国こそが私たちキリスト者の最も望ましい美しいところでもあります。そこには罪がないからです。そこにはもはや涙も病気も死も、何もないからです。完璧な世界です。クリスチャンにとってはこの世が最悪です。私たちは死をもって天国という素晴らしいところに、完璧な世界に引越していただけるわけです。ですからキリストを信じる者には、肉体的な弱さ、それは何の障害にもなりません。

そして、経済的にもイエス・キリストは私たちの面倒をしっかりと見て下さいます。ピリピ 4:19 にこう書いてあります。『また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要を（一部ではありません。）すべて満たして下さいます。』経済的にも財政的にも私たちの復活の主は面倒を見て下さいます。

また詩編 84:11『まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いもの

を拒まれません。『“正しく歩く者たち”とは、キリストを信じて義と認められた者、クリスチャンということであります。勿論クリスチャンは完全無欠な者ではありませんが、でもすべてのクリスチャンの罪はイエス・キリストが十字架に負って死んで処理して下さいました。クリスチャンだけの罪を処理したわけではありません。信じる者も信じない者もすべて全人類の罪をイエスが十字架に負って下さったので、私たちは義と認められた、無罪とされた、正しい者とされたわけです。信じないのはどうか、と思います。失うものは何もありません。あなたの罪は信じるだけで赦されるんです。そしてあなたは罪から来る報酬を自分で払わなくてもいいんです。『罪から来る報酬は死です。』と聖書は言います。でもイエスが代わりに死んで下さったので、私たちはもはや永遠に死ぬことはありません。肉体の死はあっても永遠の死はありません。永遠に地獄というところで責められ苦しめられるということはないわけです。そんな私たちには、『良いものは拒まれない。』とあります。これは、「良いものを差し控えない」と、「良いものを与えずにはおかない」とも訳される言葉であります。

また同じく詩篇 34:10 にこう書いてあります。『若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。』“主を尋ね求める者”は、皆さんもそうして下さい。そうすると『良いものに何一つ欠けることはない。』とあります。「でも、私は良いものに欠けています。家にはベンツがありません。ロールスロイスがありませんよ。フェラーリがないですよ。良いものがないですよ。欠けていますよ。」と、あなたは言うかもしれません。黙示録には天国の描写が与えられておりますけれども、そこには「天国の道路は黄金である。」と、道路が黄金で出来ているんです。天国において黄金というものは、ゴールドは、この地上におけるアスファルトに等しいということです。誰もアスファルトを削っている人はいません。これは価値のあるものだ。天国の黄金の道路を削っている者は 1 人もおりません。そんなものは価値がないからです。ですから、私たちが地上で「ベンツが良いもの。ロールスロイスが良いもの。フェラーリが良いものだ。」とあって、「良いものが欠けていますよ。」とあなたは言うかもしれません。「こんなに良いものが私には与えられていません。」と、あなたは不平不満を漏らすかもしれません。でも実は天国においては、それは特別なものでも、良いものでもなんでもなし、何の価値もないものだということにあなたは気付くようになります。

むしろあなたが欠けていると思っているものは、あなたにとっては実は良くないものだという事です。それが真実であります。与えられていないもの、自分に欠けているもの。それは健康と言うかもしれません。「私には健康がありません。健康は良いものじゃないですか。」確かにある人にとっては良いものです。でもある人にとっては、もしかしたらそれはそれほど良くないものかもしれません。ある人たちは「病気になってよかった。」と言う人がいます。「障害を持ってよかった。」と言う人がいます。ハワイのプロサーファーで 13 歳の時にサーフィンをしている時に大きなサメに片腕を食いちぎられた女の子がおります。ベサニー・ハミルトンという女の子ですけれども、彼女のことを知らない人はアメリカにはいないと思いますが、日本でも『ソウル・サーファー』という本で彼女の自叙伝が出ておりますし、それはまた映画化もされていますから DVD でも見ることができます。非常に有名な女の子です。まだ若いです。彼女はクリスチャンのサーファー一家で育ちました。ですから 13 歳の時からプロサーファーを目指していたんですけれども、片腕をサメに食いちぎられたんです。でも一命を取り止めて今生きているわけですが、彼女は片腕をなくしましたけれども「それで良かった。」と言っています。「むしろそのほうが良いんだ。」とも言います。なぜならば、多くの希望を失った人たちに希望を与えることができるから。あるインタビュアーが「もう一度その左腕を取り戻せるなら、取り戻したいですか？」と聞いたところ、「いいえ。私はこの左腕を取り戻したくありません。」とハッキリ彼女は言いました。「左腕がなくなると、私は何でもできます。むしろ、ない方が良いんです。」と。素晴らしいですね。彼女はイエス・キリストを信じる者で「私にとって、プロサーファーにとって、サーフィンよりも大事なものがあります。それがイエス・キリストです。」と明言しています。まだ若いですが、それが言えるんです。皆さんはどうでしょうか。「イエス・キリストが私にとって何よりも大切なお方です。お金よりも、健康よりも、家族よりも、自分の愛車よりも、マイホームよりも、宝石よりも、ブランド品よりも、何よりもイエス・キリストが私にとっては 1 番大事なものです。」と、あなたは言えるでしょうか。そう言える者にとっては、たとえ左腕がなくなっても右腕がなくなっても、足がなくなろうと、健康がなく

なろうと、お金がなくなろうと、何もかも失うことがあったとしても、平安でいられます。むしろ「その方が良かった。」とすら言えるんです。あなたが欠けていると思っているものは、実はあなたにとっては良くないものだ。私もそのように確信しております。

人間関係の死の恐怖もイエスがしっかりと面倒を見て下さいます。愛する者があなたから去っていきます。親友があなたを裏切って去っていきます。かつての仲間があなたから去っていきます。結婚が破綻して離婚いたします。沢山の傷を受けます。でも、知って頂きたいと思います。イエス・キリストはあなたのうちに住んでおられます。イエス・キリストはよみがえられた方です。どんな死もこの方の前に立ちおおすことはできません。そしてイエスはすべての死の恐怖から私たちを解放して自由にして、そして立ち上がってすべてを回復して下さるお方でもあります。死から命へと。ヨエル 2:25 にもこう書いてあります。『いなご、ばった、食い荒らすいなご、かみつくいなご、わたしがあなたがたの間に送った大軍勢が、食い尽くした年々を、わたしはあなたがたに償おう。』イナゴによって全て食いつくされてしまったものも、神が償ってくださる、回復して下さると言っているわけです。よみがえりの主が、失ったすべてのものをあなたのために償ってくださる、回復して下さるんです、取り戻して下さるんです。傷つけられた者も癒されるんです。離婚の痛手もあるかもしれません。でも、主が失ったすべてのものを償ってくださるんです。聖書の神は、皆さんには何度も伝えていますが、聖書の神はセカンドチャンスの神です。何度でもやり直しをさせて下さる神です。哀れんで下さって、とことん私たちを憐れんで見捨てない神です。見放さない神です。聖書の神はローマ 8:28 の神です。『神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。』これが、私たちの知っている神です。あなたがこの神にすべてをお任せするならば、委ねるならば、この神の御心に計画に服するならば、主があなたのうちに働かれて、すべてを益として下さいます。そしてあなたは必ずいつの日か主に向かって「主は素晴らしい。主はほむべきかな。」あのヨブのように、すべてを失った彼のように、あなたも最後には主の前にただ主を礼拝するほかはなくなるようになります。「私は死の恐怖にすっかり縛られていた。暗い日々がしばらくあった。けれども復活の主が、この絶望的な状況の中に、この真っ暗闇の中に来て下さった、よみがえって下さった、立ち上がって下さった。もう私は何も恐れることはない。」怖いものなしです。クリスチャンは、怖いものなしの人たちであります。小心者のあなたもキリストを信じることで怖いものなしの無敵な者になります。主は私のうちにもあなたのうちにも住んでおられます。でもあなたは言うかもしれません。「神は天地万物を造られた創造主だと聞いています。宇宙を造られた方は、宇宙よりも大きい方ではありませんか。神は何よりも大きい方ではありませんか。その神がどうして私のようなちっぽけななりに過ぎない私の心の中にどのようにして住んで下さるのでしょうか。」それがミソです。それがグッドニュースです。大き過ぎる方ですけれども、私たちのうちに住まわれます。この方は不思議な方で、私たちのうちにも住むことができます。そして大き過ぎる方ですから当然のことながら私たちの内には収まりきれない方です。大宇宙をもってこの創造主を収めることはできませんが、それと同じように主が私たちのうちに住むというその時には、私たちのうちからはみ出るわけです、溢れ出るわけです、輝き出るわけです。それが、キリストが私たちのうちに住んでおられるという奥義、ミステリーです。栄光の望みとは、私たちのうちからこの神が溢れ出てくるんです。命が、喜びが、平安が爆発するんです。それがクリスチャンという存在であります。留まっておられない方です。はみ出してしまふ方です。あまりにも大きい方です。ですからあなたは自分が確かにちっぽけな者かもしれません、小心者かもしれませんが、あなたよりも大きな方があなたのうちに住んであなたからはみ出てくださるんです。あなたを大きくしてくれるんです。あなたの能力を超えて、限界を超えて、自分では信じられないようなことが、あなたにはできてしまうんです。驚くべき体験であります。クリスチャンになってあなたはそのようなことを体験したことがあると思います。「私は無学です。ろくに教育も受けていません。何の経歴も経験もありません。」なのにあなたは、自分では考えられないような、自分の能力を遥かに超えたようなことをやってのけました。ただ一心に「主の栄光のために。」と願ってやったことです。あなたは自分でそのことをびっくりします。「こんなこと絶対に前だったらできなかった。なのに、私はこんなにも弱かったのに、精神的に薄弱で人前に立って話すなんて、大の苦手です。赤面症なんです。人の前で何かものをしゃべ

るなってとんでもありません。」実はそれは私のことです。私は人の前では何も言えない者なんです、本当は。何遍もこのことは言っていますけれども、信じられないと思うかもしれませんが、その通りです。信じられないと思います。私のうちに住まわれるよみがえりの主がおられるから、今こうして皆さんの前に立って話すことができるわけです。もう上がってしまって頭が真っ白になってしまう。もう手が汗でびしょりになってしまう。それが本来の私です。でもあなたのうちによみがえりの主が住んでおられると、あなたは弱さを、苦手意識を克服できます。自分ではやめられなかったその依存症も、中毒症も、その罪もやめられます。勿論そんなちっぽけな目的のためではありません。その自己啓発のためにイエスはあなたのうちに住んでおられるではありません。そんなことで満足しないで下さい。クリスチャンになったら完璧な人格を持つだとか、弱さを克服して良い人になるだとか、そんなものじゃありません。もっとダイナミックな力が働くんです。あなたの内側から劇的に変えられていきます。性格も何もかも、本来の性質も全部変えられるんです。ただ長所が伸ばされるとか、短所が抑えられるとか、そういう話ではないんです。全くあなたは新しく造られたものに変えられてしまうんです。それが豊かな人生を送る鍵となります。キリストがあなたのうちに住まわれるということ。「人生がただ向上する、良くなると。ただ前向きに生きることができる。自己啓発。望み通りに夢が叶う。」それがキリスト教ではありません。キリスト教は、キリストがうちに住んでおられるというその真理。それがあなたを自由にします。それがあなたに希望を与えます。

この真理を最後に現実的に実際的にどのように当てはめて、この真理がどのように働くのでしょうか。「私はクリスチャンです。けれども私はイエスが自分の罪のために死んで下さったことを信じています。けれどもイエスが死から目がよみがえって下さったことも信じています。けれども私は相も変わらず肉体の死の恐怖に今も縛られています。死のことを考えるだけこわばってしまいます。戦慄が走ります。恐怖なんです。その時には今日のストーリーを思い出して下さい。今朝のテキストは**マタイの 28 章**、日曜日の早朝にマグダラのマリヤと、そしてヤコブとヨセフの母マリヤがやったことを思い出して欲しいと思います。彼女たちがやったことというのは、イエスの遺体が安置されていた園の墓に行ったということです。彼女たちは十字架につけられたイエス・キリストに会いたかったんです。イエスがそこにおられるだろうと、そう思って彼女たちはイエスの元を訪れたわけです。イエスが死んでいてもなおイエスに会いたかったわけです。これが現実的な実際的な真理をどのように当てはめるのか、この真理がどのように働くのか体験できる素晴らしい模範です。方法と言っても良いと思います。つまりイエスをあなたが最後に見たそのところに戻るといことです。イエスに出会った最後の場所、「あの時私はイエスに出会いました。」そこへ戻って下さい。そこにイエスがおられるかどうかは、今は半信半疑かもしれませんが。不確かであろうかと思えます。ほとんどそこでイエスに会えるかどうか期待もしていないかもしれませんが。それはマグダラのマリヤや、またもう 1 人のマリヤのようであるかもしれませんが。でも、それでもです。期待薄でも、それでもイエスがおられるだろうと思うところに行ってみて下さい。そうするとあなたは必ずマグダラのマリヤやもう 1 人のマリヤのように「おはよう。」という声にハッとさせられます。イエスは彼女たちに出会って下さいました。「おはよう。」おそらくユダヤ人ですからヘブル語で「シャローム。」と言ったと思います。「シャローム。」というのは、おはよう、こんにちは、おやすみなさい、さよなら、何でも使える挨拶の言葉ですけれども、朝だったので「おはよう。」と意識されています。イエスは、今ありとあらゆる死の恐怖に縛られているあなたに「おはよう。シャローム。平安があなたにありますように。」と、「シャローム。」というのはそのような挨拶でもあります。そのようにあなたに声をかけて下さい。

そしてイエスは「よく来てくれた。よくこの私に会いに来てくれた。」と、あなたに歓迎の挨拶を必ずして下さるはずで。ヤコブ 4:8 に『**神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。**』という約束の言葉があります。神に近づいて下さい。そうすれば、神の方からあなたに近づいて、そしてあなたに声をかけてくれます。あなたが最後にイエスに出会ったそのところへ戻って来て下さい。「そこにはイエスがおられるかどうか本当はよく分かりません、半信半疑です。本当にそこにイエスがおられるのかどうか。イエスが本当に生きているのかどうか分かりません。」でも、それでも行って見て下さい。必ず、イエスに会いたいとあなたが願うならば、イエスに近づきたいとあなたが願うならば、イエスの方からあなたに近づき、必ず死の恐怖に怯えてしまっている、(ありとあらゆる死です。

肉体的な死もそうです。経済的な死も、人間関係の死も、職業的な死も、いろんな死がありますけれども、そんな死に縛られている、)望み得ないすべてを失ってしまったようなあなたに、復活の主は現れて下さって、立ち上がって下さって、あなたに声をかけてくれます。是非その声を聞いて、今日はお帰り頂きたいと思います。もしまだイエス・キリストを自分の個人の救い主、人生の主として信じておられない方があれば、是非後回しにせずに今日が素晴らしい主からの恵みの時だと思って下さい。チャンスです。勿論何度でもチャンスは生きている限りは与えられるかと思いますが、明日が必ず来るとは限りません。運転中にくも膜下出血で(脅すわけではありませんが)、急に大地震が来る(復活の朝も大きな地震がありました。)、何があるか分かりません。でも何があっても怖くない。今日死んでも大丈夫。余命 3 ヶ月と言われても動じません。そのような力が勇気があなたのうちに今ないならば、死んだら確実に天国に行けるんだという確証が保証があなたのうちにないならば、是非今日この瞬間にイエス・キリストをあなたの個人の救い主として、自分の罪のためにこのイエスが十字架にかかって死んで、三日目によみがえって下さった主ですべてのありとあらゆる死の恐怖から私を解放して、そして私を天国に確実に連れて行ってくださる。そのような愛すべき方だと、是非自分の主を自分の心に迎えて頂きたいと思います。このキリストにあなたの心に住んで頂きたいと私はあなたに願います。そのような願いを持ち、今信じたいと願う方がいるならば、是非このあと一緒に祈って欲しいと思います。もっと詳しく知りたいという方は、礼拝の後にでも来て欲しいと思います。個人的にもお祈りしたいと思います。もしこのメッセージを CD やインターネットで聞いて、その時に信じたい決心したいと思う方はその場で一緒に祈ってみて下さい。お祈りいたします。

「天の父なる神様、聖書によればあなたの御子イエス・キリストは、私たちと同じように人間の姿をとって私たちの間に住まれ、私たちのすべての罪を十字架に負って死んでくださり葬られて、そして三日目によみがえって下さいました。それは私たちをありとあらゆる死の恐怖から解放するため。そして私たちを永遠の命に満ち溢れる完璧な天国というあなたの家へ入れて下さるためであります。そのようなイエス・キリストを自分の救い主として今心で信じ、この心にお迎えいたします。どうか主が私の主となっていくつまでも共に住んで下さいますように。そして何があっても、どんな恐怖が襲ってきても、自分のうちにおられるよみがえりの主がいつでも立ち上がり、いつでも恐怖から解放して「恐れることはありません。」と、「もう恐れることをやめなさい。」と声をかけてくださる生きた神であるということを感じて歩むことができますように。この私のために、ここにいる一人一人のために、御子イエス・キリストが人となって実に十字架の死にまで従って、死に打ち勝ち黄泉からも生還して、復活してこの世に現れ、天に上げられ、そのキリストの御霊が信じる者のすべてのうちに住んで下さることを心から感謝いたします。主は今生きておられる。我がうちにおられます。だから明日も怖くはありません。死も怖くはありません。イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。」